MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

ミステリ読書案内

２０２３．９．１　発行元
第 510 号　伊藤　剛
https://mystery-dokuan.com

MYSTERYDOKUSHOANNAIMYSTERYDOKUSHOANNAIMYS

中・高校生にお薦めの本その25

中学生、高校生にお薦めするミステリ本の紹介の２５回目。今回は一度第１６号で題名だけを紹介した講談社『ミステリーランド』シリーズの中から４冊を選んだ。少しその内容に触れてみることにした。

講談社「ミステリーランド」

講談社の『ミステリーランド』シリーズは２００３年から２０１６年にかけて発行された小学生・中学生向けの書下ろしミステリ全集で、３０作家による３２冊が刊行された。布張り・箱入りの凝った造本で高級感があった。箱には円形の窓が開いており、表紙絵の一部が見えるつくりだった。

今から十年くらい前にはどこの図書館でも開架書棚に並んでいたものだったが、今は恩田陸の最終巻以外は閉架に移されてしまった本が多い。良書なので、全集本、シリーズものとして開架に並べておいてほしいと思うのだが…。

すでにこの私の『ミステリ読書案内』で何冊か取り上げているが、今回はそのシリーズの中から新たに４冊を選んでみた。「ハラハラドキドキ」の雰囲気だけでなく、「推理」の面白さを味わえる作品がお薦めだ。歌野晶午『魔王城殺人事件』や綾辻行人『びっくり館の殺人』はミステリの王道の展開と言ってもよい。是非読んでみてほしい。

歌野晶午「魔王城殺人事件」

２００４年の第５回配本。現在は講談社文庫版にもなっている。

星野台小学校５年生の佐藤翔太が「ぼく」で主人公。ＫＡＺ（宇田川香月）などと一緒に「５年１組捜査１課」を結成し、「デオドロス城」と自分たちで名付けた西洋館の探検に出掛ける話。この館は町はずれにあり、茶色の木造の古い屋敷。レンガ塀で囲まれている。いろんな悪い噂が飛び交っている建物だった。潜入してみると、庭の小屋の近くでゾンビ女と遭遇。でもすぐに消失してしまった。次の機会には仲間を増やして再挑戦。今度は乳母車男の死体を発見することに…。でも、その死体はまたまた消失してしまったのだ。「本格謎解き」の要素を盛り込んだ作品。

加納朋子　「ぐるぐる猿と歌う鳥」

２００７年の第１３回配本。現在は講談社文庫版にもなっている。プロローグでは主人公の高見森（しん）が５歳の頃の不思議な体験について触れている。そして本文に入り、小学五年生になった森は、父親の仕事の関係で東京から北九州へと引っ越しすることに…。それまでは学校などで乱暴者とみなされ、厄介者扱いされて居心地が悪かったのだが…。新しい土地の新しい社宅についてみると、まわりの子どもたちが温かく迎え入れてくれた。十時あや、佐久間心（ココちゃん）、竹本五兄弟…。ほっと一息の森だったのだが、この社宅には何か不思議な秘密めいたものを感じるのだった。一番気の合う変わり者のパックと…。

北村　薫「野球の国のアリス」

２００８年の第１４回配本。現在は講談社文庫版にもなっている。ミステリというよりはファンタジーの内容。冒頭にルイス・キャロルの『鏡の国のアリス』の引用があるように、パロディ風のつくりになっている。少年野球チーム・ジャガーズのエースだったアリスが、新聞記者の宇佐木さんがぴょこぴょこ走っていく後を追いかけた。時計屋の前にある大きな鏡の中に入っていったので、アリスもついていってみると…。そこは野球の国だった。その世界では中学生の女の子も野球をやっていて、負け続けたチームが最後にたどり着く「全国中学野球大会最終戦」というものがあって…。

綾辻行人　「びっくり館の殺人」

２００６年の第９回配本。その後講談社ノベルスに入り、現在は講談社文庫版にもなっている。題名を見てわかるとおりに『館シリーズ』の中の一冊という構成になっている。「びっくり館」を設計したのは中村青司になっている。

冒頭、この物語の語り手である永沢三知也が古書店で鹿谷門実著の『迷路館の殺人』を手に取る場面からスタートする。中に登場する中村青司の名前から、十年前に自分が「びっくり館」で体験したことを思い出すという流れ。十年前、東京から関西に引っ越してきた三知也は小学六年生で、塾の帰りに寄り道をして屋敷町の古屋敷俊生（トシオ）と出会い友達になる。十二月、三知也が「びっくり館」を訪ねている時に惨劇が起こる。二階の一番奥にある「リリカの部屋」。三知也と同級生の湖山あおい、家庭教師の新名努の三人で行ってみると中から鍵が掛けられている。中にいるはずの当主の古屋敷龍平は呼びかけても返事をしない。体当たりして扉を開くとナイフで刺された古屋敷が…。